

# HONライン 倶楽部

## 氷室 冴子の巻

氷室冴子さんの葬儀で最も印象的だったのは、焼香に訪れた読者と思しき人々が、例外なく涙を流している姿であった。

氷室さん本人は読者と親しい関係を築くタイプではなかったから、その涙は純粋に作品が流せしめたものに違いない。

だとしたら、あの肩を震わせ、号泣していた読者たちは、作者が作品を通して彼らと成し遂げるコミュニケーションの理想を実現していたことになる。すなわ

### 菊地 秀行 作者の理想を實現

ち、登場人物を「これは私だ」と心の底から納得することである。

どのようなジャンルの小説でも、これは至難の技である。血の通った登場人物たちが、作りものではない人生を生きない限り、読者は決して心を動かされないからだ。氷室冴子だけが、それを可能にした。彼女がいなければ、少女小説とい

うジャンルは生まれても、成熟は随分と遅れていたに違いない。

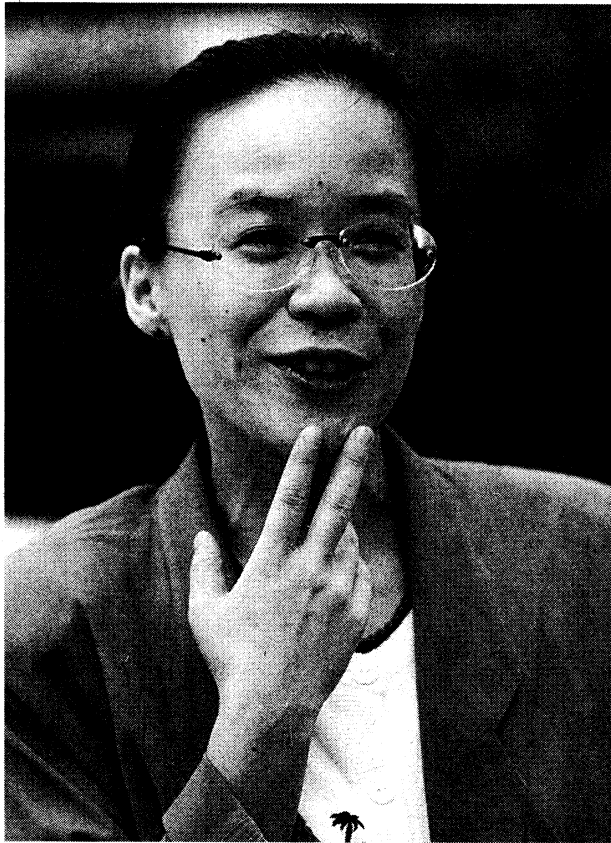
男女には抜き難い性差があるが、それを越えて共通項も存在する。氷室冴子はその共通項の素晴らしさを描き続けた。それは人間の素晴らしさを謳い上げることであった。

生前の彼女に、「人間と違うのはどうしようもない存在だが、その中に光りかがやくものを見つけたのが作家の仕事だ」と冗談半分に言ったことがある。こう返ってきた。「そうよ、そのとおりです」

あのときの、同志を見つけたような熱い声が、氷室冴子の作家としての原点だと思ふ。だからこそ、彼女の読者は幸せなだった。

(作家)

昨年6月、51歳で亡くなった氷室冴子さん。恋、友情、そして少しずつ大人になっていく不安……。女の子なら誰もが通り過ぎる「あの頃」を鮮やかに切り取った数々の作品は、少女小説の枠を超え、今も多くのファンの心を魅了しています。



(1991年撮影)

ひむろ・さえこ 1957～2008年。北海道岩見沢市生まれ。大学在学中の1977年、「さようならアルルカン」が集英社の「小説ジュニア」(現・コバルト)の青春小説新人賞佳作となりデビュー。明るく前向きな女の子が主人公の軽快な小説やエッセーなどで絶大な人気を博した。

ん(41)は「気持ちがあるのすごく分かる」と熱く語ります。

好きなのに素直になれない男子高校生の青春を描き、スタジオジブリによるアニメ化もされた『海がきこえる』(徳間文庫)を「思春期の子どものたちの心に、じんわりしみ入る作品だったのでしょね」と言うのは、和歌山市の中学教諭、北野愛子さん(35)。教室で朗読したところ、多くの生徒が熱心に耳を傾けてくれたそうです。

女性の投稿多数の中で、「黒一点」、福島県郡山市の大竹新さん(40)は、少女の頃誰かがあこがれた寄宿舎生活を描いた『クララ白書』『アグネス白書』(ともに集英社コバルト文庫)を「漫画でも読むように笑ってこぼれながら」読んでいたとのこと。東京都江東区の保育補助員、井手ちはるさん(50)は大人になってからも

## 思春期の心に共感と勇気

早すぎる作家の死を悼んでのことなのでしょうが、投稿の多さに驚かされた今回の特集ですが、最も多くの推薦があったのは、やはり、平安時代を舞台に明るくおてんばな瑠璃姫が活躍するラブコメディー『なんて素敵にジャパネスク』シリーズ(集英社コバルト文庫)。山内直実さんによる漫画化やテレビ・ラジオドラマ化もされた人気作です。

「昔の人たちも今の私たちと変わらぬ生活をしていて、と古典を身近に感じることができました」という大阪府堺市の薬剤師、橋本廣子さん

(39)や、「この本を読んだから、古典や歴史に興味を持って勉強し始めました」という東京都昭島市のアルバイト、高橋聖子さん(30)のように、同作をきっかけに古典や歴史に興味を持ったという声もたくさん寄せられました。

氷室さんの古典ものシリーズでは、同じく平安時代の『りかへばや物語』を翻案した『ざ・ちえんじん』(同)や、古代日本を舞台にした『銀の

海 金の大地』シリーズ(同)にも票が集まりました。

「これはまるで自分のこと?」。そう思ってしまうような等身大の女の子が主人公の作品も、見逃せません。

福岡市の主婦、成富典子さん(36)のおすすめは、恋や受験に揺れる思春期の心を男女それぞれの視点でたどった『なぎさボーイ』(同)と『多恵子ガール』(同)。「男の子の気持ちを知らたり、気持



ちのすれ違いに心おとらされたりする本でした」。自分を押し殺して周囲に迎合していく少女が登場する『さよならアルルカン』(同)も共感の声の多かった作品。埼玉県飯能市の会社員、関口珠江さん(50)は大人になってからも

「気持ちは切なくなるほど分かりました」、甲府市の会社員、武井香澄さん(28)も「10代の頃、どうして私はこんななのだろうと苦しかった時代にこの物語に出会いました」と書き送ってくれました。

埼玉県越谷市の主婦、田中節子さん(45)が言うように、多感な時期に読書の楽しさも教えてくれた氷室作品。今では書店で手に入らないものもありますが、残された名作の数々は、これからも多くの少女や女性に、勇気と元気を与え続けてくれるに違いありません。

(金巻有美)